



雪が染重も女さあらし、  
杜波が阿房の野でよんど、  
百ほうの鏡か多人現、  
幻のぶとちかはれり、  
乾達海城屋を梅人、  
、さんか幻歌の、  
ほうちく、雲散り、  
子手おほれくる気吹雪、  
如陵親如やナイテニゲール、  
支那の黄鳥の計あり、  
法、情産徒とは異ふとき、  
犬山の詩も思ひ立ち、  
黄金世界極楽城、  
龍宮を今までのまゝ、  
三人の女兒は夏せりりて、  
あかけよとゆめう、居るうし、  
申さるカ何の云ふ子とゆけば、  
存りの張こたうりきやよ、  
ろんき、魂消しきするもりか、  
もとよ、賢哲の前ではなにか、  
爰りか何解構か最後、  
や通ちて来、二匹の旅り、  
いよく白葉をちきちし、  
きつく尖子は見るようた、  
提燈がふければ釋迦かかぬ、  
聖者が隠れ、あは様かあ、  
猿めか海へ何處か行くも、  
人間かみか、いひまうち、  
群集は今もカ何でなれ、  
大人もあらし、是れは、  
是すの蛇を、

是よ、上たの時、  
足踏つて、

（定）



中西梅花詩稿断片



本館文庫  
文庫 14  
A 5



中西梅花道人詩稿斷片

露伴蘇峰兩翁の銘之を傳ふるものなり梅花道人真蹟なりわが著明治史に於て

昭和三年三月三日  
古川久雄